

仙台教区サポートセンター

福島デスクニュース

第23号 2016年7月

作成：仙台教区サポートセンター福島デスク
〒975-0001
福島県南相馬市原町区大町 2-197
fukushima.desk@gmail.com
Tel/Fax 0244-32-1531
080-5872-4447
<http://fukushimadesk.blogspot.jp/>

EU 離脱。イギリスの国民投票は福島にも波紋

難民や移民の受け入れを拒否する態度。イギリスにおける国民投票の一連の報道は、福島県に住む人々の心を揺さぶった。東京電力福島第一原発の事故直後の混乱や避難生活、人の大移動と避難者の受け入れの難しさを思い起こさせ、これからを考える時となった。

現在も、原発周辺地域からの避難者と地元住民の間の壁は、確かに存在する。高額な賠償金について話題に上ることも多い。長期にわたる原発の廃炉作業や除染に携わる人々が増加すれば、町は大きく変わっていくことだろう。このような現実の中で、「日常を取り戻す」取り組みを進めている人たちがいる。今号では、夏休みの親子の話題をお届けする。

子ども、親子、そして地域の大人たち 多世代コミュニティハウス



福島市笹谷。JR 福島駅から 5 キロほどの住宅地に「みんなの家」がある。運営は NPO 法人ビーンズふくしま。

ビーンズでは震災前から不登校の子どもや、ひきこもり、ニートの若者たち、その家族をさまざまな視点から支援していた。震災後、ママカフェ等の親子支援を開始し、昨年 3 月、子どもから地域のお年寄りまで多世代の人が集えるように、みんなの家をオープンした。

プログラムは多彩で、同世代の子どもを持つ母親たちが集まれるように、『ベビママ day』、『小学生ママ day』、

『中高生ママ day』、『ママトーク』がある。また、大人の部活『エコクラフト部』に『ちくちく・あみあみ部』では趣味を通して互いに知り合い本音も出る。季節の行事、『七夕ヨガ day』では、郡山市のママ支援仲間のコーチでリフレッシュした。

夏休みには、『キッズクッキング』、『スラスラ感想文』、『わくわく理科教室』など盛りだくさんの企画が並んでいる。国語の先生に読書感想文のヒントをもらい、理科教室は企業の協力を得て、夏休みの難関の宿題「自由研究」に役立ちそうな「フィルムケースロケット&熱気球をつくって飛ばそう！」が楽しみだ。

みんなの家の特徴は、企画の数や目新しさだけでなく、ママカフェのご縁が生かされ、互いに学びあい、支えあう関係が築かれたことだろう。

さらに注目したいのは、「ご近所 day」での地域の人たちとのプログラムである。福島市笹谷地区は 50 年前に宅地分譲された地域で、高齢化が進んでいる。



6月の『ご近所 day・ちまき作り』では地域の人たちが先生になり、子どもたちだけでなく地域の大人たちの喜びの場となった。震災後、福島県内各地ではじまった「ママカフェ」は、避難生活を終え福島に戻ってきた母親向けのサロンであったが、「みんなの家」では少子高齢化が進む社会のモデルともいえる活動にと進化しつつある。

水族館で放射線の学習 市民と科学者のサイエンス・コミュニケーション



いわき市小名浜のアクアマリンふくしまでは、毎月、第3日曜日に、「調ベラボ」を開催している。

「ポテトチップスは何ベクレル？ 400 ベクレル/キログラムだよ。カリウムが含まれているからね」

「花火は？ 6700 ベクレル。口を開けて見ていたら、どうなるかな！放射性カリウムの半減期は12億年だったよね。因みに、ビールは5ベクレル」と獣医は笑わせる。

震災後に放射線について学んだものの、断片的な知識にとどまっている一般市民は、食品の基準は100ベクレル以下なので、400ベクレルと聞いて驚き、放射性カリウムのせいと聞いて、そうだと人体には4000ベクレルあるんだっけ、と思い出す。獣医の説明は生活レベルでの放射線についての知識を分かりやすく、整理整頓してくれる。

原発からわずか1.5キロ沖の海底土の放射線がND（不検出）。「セシウムは粘土質にくっつくでしょ。これはサラサラの砂だから」との説明に納得する。

「1.5キロ沖の空間線量は毎時0.5マイクロシーベルト。低いよね。水が放射線を遮蔽するんだ」なるほど。

水族館アクアマリンふくしまでは、いわき海洋調べ隊「うみラボ」と一緒に、東京電力福島第一原子力発電所前の海洋調査を行っている。

市民グループ「うみラボ」は海洋調査の同行者を募り、毎月、福島第一原発1.5キロ沖まで近づく。水族館の獣医の協力で採泥器を使用し海底土を採取した後、サンプル魚を釣る。

後日、水族館の「調ベラボ」で、獣医が漁獲した魚を参加者の目の前でさばき放射性物質量を測定する。見事な包丁さばきに感嘆の声が上がる。魚の種類や年齢によって放射性物質の量が異なるとの説明に子どもたちは目を輝かせる。

魚が大好きな獣医先生の話は分かりやすい。一般市民が理解できる説明だ。一般市民と研究機関のサイエンス・コミュニケーションの不足が、原発事故後の混乱を招いた一因だが、改善されているのが分かる。

親子での参加者が多く、家族のコミュニケーションの場ともなっている。プロの漁業者の試験操業・検査とは別に、研究者を含む釣り仲間のグループが行う楽しい取り組みは、科学をより身近に感じることができる。

この水族館では小・中学校での放射線学習の出前授業も実施している。

